

HMC 第 115 回オープンセミナー／現代民俗学会 第 74 回研究会  
上海 —ノスタルジアの表出と文化遺産の創出—

[発表要旨] (中文／日本語)

城市中潜在乡愁的激荡  
——以“上海故事汇”活动为中心的考察

郑土有

在高度现代化的大都市，口头讲故事活动是否还有生存空间？如果仍然存在，那么支撑其传承的动力是什么？近十几年来，以“上海故事汇”为代表的上海故事讲述活动，可以在一定程度上回答上述问题。“上海故事汇”于 2012 年 4 月 29 日正式开讲，由上海民间文艺家协会和上海市群众艺术馆共同策划创办，由《上海故事》杂志社承办。至 2024 年 5 月 5 日，位于上海市群众艺术馆三楼的主会场已举办了 242 场，讲演频率为每月 2 场。自 2013 年起，又分别开设了 7 个分会场：虹桥故事汇（虹桥社区文化中心）、枫林故事汇（枫林街道文化中心）、山阳故事汇（金山嘴渔村茶馆）、曹路故事汇（浦东金海文化艺术中心）、金山故事汇（金山区文化馆）、长宁阿拉故事汇（长宁文化艺术中心）、黄图故事汇（黄浦区图书馆），每月举办 1 场。总体而言，“上海故事汇”活动持续发展，蒸蒸日上，显示出了一定的稳定性、持续性，以及逐渐壮大扩散的趋势。除此之外，在金山枫泾镇、山阳镇和浦东曹路镇也有不定期的故事讲述活动。

在上海这座中国现代化程度最高的都市，口头讲故事活动居然受到市民的广泛喜爱，是一个值得关注的现象，究其原因背后的原因固然有许多，但“乡愁”是其中重要的因素。

都市における潜在的ノスタルジアの揺れ動き  
—「上海故事匯」の活動を中心とした考察

鄭土有

高度に近代化された大都市で、口承による物語り活動にはまだ余地があるのだろうか？余地があるとすれば、その継承を支える原動力は何だろうか？こうした問いにある程度の答えを出すのが、過去 10 年ほどの「上海故事匯」を代表とする上海における語りの活動かもしれない。2012 年 4 月 29 日に正式に開始した「上海故事匯」は、上海民間文芸家協会と上海群衆芸術館が共同で企画・設立したものであり、上海故事雑誌社が主催している。2024 年 5 月 5 日現在までに、上海群衆芸術館の 3 階にある会場にて月 2 回の頻度で計 242 回の公演を行ってきた。2013 年からは、虹桥故事匯（虹桥社区文化センター）、楓林故事匯（楓林街道文化センター）、山陽故事匯（金山嘴漁村茶館）、曹路故事匯（浦東金海文化芸術センター）、金山故事匯（金山区文化館）、長寧阿拉故事匯（長寧文化芸術センター）、黄図故事匯（黄浦区図書館）の 7 つの分会場が設立され、それぞれ月 1 回の活動が実施されている。全体として「上海故事匯」の活動は着実に発展し、安定性と持続性を有しながらさらなる拡大の傾向を示している。このほか、金山楓涇鎮、山陽鎮、浦東曹路鎮でも不定期に語りの活動が開催されている。

中国で最も高度な近代化を達成した都市である上海において、これほどまでに口承での物語りが市民に愛されているという現象は、注目に値する。その背後にはさまざまな要因があるが、「ノスタルジア」はその重要な要素の一つである。

## 景观化和浪漫化：都市空間中の乡愁营造

徐贛麗

由于独特的区位条件与城市历史，上海成为国内外不同文化汇集、交流和对话的空间，其乡愁情怀也呈现更为复杂的面向。上海在近代时期曾作为多个发达国家的租界极为繁华，但其繁华一现的命运让上海人对其所接触的西方文化有一种怀旧。随着城市发展和更新，上世纪90年代，上海按照新的城市规划进行了大拆大建，造成城市风貌的改变；与此同时，伴随着经济增长和物质的丰裕带来传统生活方式的巨大变化，于是，上海城市生活的各个层面都弥漫着怀旧。这股怀旧风潮蔓延到生活的诸多层面，并与“老上海”所带来的怀旧情绪杂糅在一起。当下生活在上海这座现代化大都市的人们有着多重的乡愁，并赋予乡愁特殊的价值。在城市微改造中，特别重视保留部分的城市历史文化记忆，在营建新的经济综合体时也有意识地规划和设计一些典型的乡愁文化空间。除此之外，现代化的城市是商业空间发达的城市，乡愁/怀旧作为文化消费的对象，被普遍地应用于都市商业空间。无论是各类修旧如旧的街区，还是新建设的风情街，设计者都极力满足市民对于乡愁的浪漫化想象，营造审美化的诗意空间，呈现出景观化的视觉效果，有意让受众产生时空的穿越感，从而满足对乡愁的渴望。在上海，新天地、田子坊、今潮8弄、1192弄老上海风情街、七宝古镇等消费空间，各种各样的“怀旧符号”都充斥着老上海的海派文化风情，成为上海市民以及新上海人，甚或国外人士感受“老上海”的文化空间。本研究通过对这些地方的田野考察，希望解读这些空间的共性，进一步理解城市乡愁诞生和衍变的逻辑，并与其他关于乡愁的研究形成对话。

## 景觀化と浪漫化：都市空間におけるノスタルジアの醸成

徐贛麗

その独特な地理的位置と歴史により、上海は中国内外の異なる文化が融合・交流・対話する空間となり、そこに現れたノスタルジアの情緒は、より複雑な様相を呈するようになった。上海は近代に先進国の租界として大いに繁栄したが、その一時的な繁栄ゆえに、上海の人々は接触した西洋文化に対してある種のノスタルジアを抱くことになった。その後の都市の発展と更新に伴い、1990年代に上海では新しい都市計画に基づく大規模な取り壊し・建設計画が行われ、その結果、都市景観は一変した。同時に、経済成長と物質的な豊かさが伝統的な生活様式に劇的な変化をもたらし、上海の都市生活の諸側面にはノスタルジアが漂っている。このようなノスタルジアの風潮は生活の様々な面に広がり、また「老上海」への懐古の感情と混ざり合っている。現代の大都市である上海に暮らす人々は複数のノスタルジアを抱えており、そこに特別な価値を与えている。都市における「微改造」では、都市の歴史的・文化的な記憶の一部を保存することが重視され、新規の複合商業施設の建設では、典型的なノスタルジックな文化空間が意識的に計画・設計されている。さらに、現代都市は商業空間が発達しているため、文化的消費の対象としてのノスタルジア／郷愁が広く利用されている。元のたたずまいを忠実に再現した街並みであれ、新設された風情街であれ、ノスタルジアに対する市民の浪漫化された想像を満足させるべく、デザイナーは美的な詩的空間の創造に最善を尽くしている。景觀化された視覚効果を示し、観客に意図的に時空を旅するような感覚を抱かせることで、ノスタルジアへの憧れを満足させようとしているのだ。上海の新天地、田子坊、今潮8弄、1192弄老上海風情街、七宝古鎮などの消費空間では、様々な「ノスタルジックな記号」が「老上海」の海派文化の香りを漂わせ、上海市民、「新上海人」、さらには外国人にとっても「老上海」を感じさせる文化空間となっている。本研究は、これらの場所でのフィールドワークを通じて各空間の共通性を解き明かし、都市ノスタルジアの誕生と変遷のプロセスを究明することによって、ノスタルジアに関する他の研究との対話を目指す。